

Noam Chomsky の生成文法理論が社会福祉学に与える影響についての一考察

—岡村理論の「自己貫徹」概念を中心に—

○ 大阪大学医学部附属病院 下村光明 (009641)

キーワード：生成文法理論・言語使用の創造的側面・自己貫徹

1. 研究目的

Noam Chomsky は 1957 年に『統辞構造論』を出版して以降、これまで文系の領域として扱われてきた言語学をサイエンスの領域に持ち込み、認知諸科学といった学問領域に影響を与えてきた (Gardner=1985). その業績は、『広辞苑 (第七版)』によれば「生成文法理論の提唱者. ことばの創造的側面・普遍的特質・習得の生得性を主張. ことばの研究を通して人間の精神構造の解明に貢献」とある. Chomsky が主張する人間に備わることばの創造的側面に着目するとき、個人と接するわれわれ社会福祉実践者は、どのように対応すべきであろうか. 社会福祉原論へ関心が高まるなか、これまで生成文法 (generative grammar) 理論を社会福祉研究として取り扱った文献はみられない. 研究目的は Chomsky が提唱する生成文法理論が社会福祉学に与える影響を人間の言語使用の創造的側面 (creative aspect of language use) を中心に考察し、生成文法理論が規定する人間観と岡村重夫が『社会福祉原論』において用いた「自己を貫徹する」人間観との親縁性を検証することである.

2. 研究の視点および方法

岡村は『社会福祉原論』において生活主体者としての個人を重視し、客観的生活関連施策をその対極として位置付けた (岡村:1983). いわゆる社会関係における二重構造のなかで社会福祉実践を説明するためには「科学の方法論」が必要となることを示唆している. 「見るものが見られるという関係で互いに意味を理解する科学」の必要性や「福祉というものは見る者がどのように対象から見られているのか、そこに相互作用が成立する」構造を科学的かつ「内在的」に追求し社会福祉実践に取り入れようとする態度は、帰納的実証主義から政策論を説明する社会学とは異なる立場である (岡村 1992:97; 中村・松本 2013:40-41). 報告者は社会福祉学における実践理論は「科学の方法論」かつ「内在的」に構築され、専門分業化された客観的生活関連施策に対し、個人の主体的側面が支援されるよう活用されることが重要と考えている. 本研究の方法は文献研究である.

3. 倫理的配慮

本研究は、一般社団法人日本社会福祉学会「研究倫理規定」に沿って研究を進めた.

4. 研究結果

研究の結果、岡村理論の「自己貫徹」概念は人間の「自由」と「創意」を内包し (岡村 1983:65), 人間の主体性を尊重する人間観であることがわかった. 一方, Chomsky は生成文法理論を自ら思想, 哲学, 歴史的な展望へ位置づけを試みた『デカルト派言語学』において、最も生成文法理論の考え方に近い Humboldt の思想をとりあげ、人間の「自由」

と「創造性」に価値をおいている。そして「自己実現の衝動は、人間の基底的な人間的必要」と Humboldt の見解を示しており (Chomsky=1976:32-40)、岡村理論の「自己貫徹」(岡村 1983:67, 99-101) 概念から導き出される人間観は Chomsky の生成文法理論が規定する人間観との親縁性が明らかとなった。

5. 考察

生成文法理論の特徴は、人間には生得的に普遍文法 (Universal Grammar) が備わり、適切な経験によって発動され、心／脳 (mind／brain) の中に成長してくる (Chomsky=2004) というものである。また酒井 (2005) は言語脳科学の領域において文法中枢が左脳の下前頭回に実在することを結論付けている。近年こうした言語の獲得から言語使用の創造的側面に関心は高く、言語の内在的 (internalist) かつ自然主義的 (naturalistic) アプローチ、説明的妥当性 (explanatory adequacy) によって研究が進められてきた (阿部:2017)。社会福祉実践そのものが、個人の言語に耳を傾ける行為を含むものであり、支援者は生成文法理論の影響から逃れることはできないと考えた。本研究において言語使用の創造的側面が、適切な経験によって発動され、心／脳の中に成長してくる生得的に人間に備わる本性 (human nature) であるならば、支援者はどのように個人と向き合い社会福祉実践をなすべきであろうか。Chomsky が Humboldt の見解として示す「自己実現の衝動は、人間の基底的な人間的必要」とするならば、支援者はさらに個人の発話や主体性に注目すべきであることが考察された。社会福祉学に「科学的な方法論」を取り入れ、かつ「内在的」に社会福祉実践理論を探究することを示唆し、個人の「自由」、「創意」に着目し、個人の主体性を支援する岡村理論は、Chomsky の生成文法理論が規定する人間観に支持され、人間に備わる「自由」、「創造性」という本性を回帰させる点で有意義な社会福祉原論であることが考察された。

【引用・参考文献】

- Chomsky, Noam(1957) *SYNTACTIC STRUCTURES* (=2019, 福井直樹・辻子美保子訳『統辞構造論』岩波文庫。) / 岡村重夫 (1983)『社会福祉原論』全国社会福祉協議会 / 岡村重夫 (1992)「見る、見られる関係を科学する」『地域福祉研究』20, 97-106. / 中村年男・松本英孝 (2013)「社会福祉学における岡村理論の位置」聖カタリナ大学『人間文化研究所紀要』18, 31-43. / Gardner, Howard (1985) *THE MIND'S NEW SCIENCE A History of the Cognitive Revolution* (=1985, 佐伯胖・海保博之監訳『認知革命—知の科学の誕生と展開』産業図書。) / Chomsky, Noam (1966) *CARTESIAN LINGUISTICS* (=1976, 川本茂夫訳『デカルト派言語学』みすず書房。) / Chomsky, Noam (1987) *Language in a Psychological Setting* (=2004, 加藤泰彦・加藤ナツ子訳『言語と認知—心的実在としての言語』秀英書房。) / 阿部潤 (2017)『生成文法理論の哲学的意義—言語の内在的・自然主義的アプローチ』開拓社。) / Sakai, K. L. (2005) Language acquisition and brain development, *Science*, 310, 815-819. / Wilhelm von Humboldt (1792) *Ideen zu einem Versuch die Grenzen der Wirksamkeit des Staats zu bestimmen* (=2019, 西村 稔編訳『国家活動の限界』京都大学学術出版会。)